

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：本田 直也 作成日：2025年12月31日

1. 教育の責任

専門性と同時に情報活用力を鍛えると共に、主体的な学習を通して学び方を学び、汎用力であるポータブルスキル（特に問題解決能力）を自ら高めていく自己学習力の養成を目指している。

「プログラミング演習Ⅰ」（演習、情報・コンピュータメジャー必修科目、春学期、2単位、5クラス108名）

「情報システム論Ⅱ」（講義、情報・コンピュータメジャー必修科目、春学期、2単位、1クラス74名）

「アプリケーション開発Ⅰ」（演習、情報・コンピュータメジャー選択科目、春学期・秋学期、2単位、3クラス73名）

「表計算演習」（演習、総合科目、秋学期、2単位、1クラス12名）

「学びの道しるべA・B」（演習、総合科目初年次必修科目、春学期・秋学期、2単位、18クラス451名）

2. 教育の理念

自ら学ぶ姿勢を重視し、一方通行型で伝達することや一斉一律型の指示をできるだけ避けるようにし、自らのペースとタイミングで学ぶことができる場と機会としている。学習者の受講前提や既修得能力が異なるのは当然であるため、その違いを認め、学ぶスピードや学ぶ順、定着を図るための反復学習の順などは学習者が自ら選択し、自ら構成できるよう、柔軟な授業を組み立てて教材を提供している。

学びの自由度は高いが、放任するのではなく、学びの意味や価値観を伝えたり、目標を明らかにして修得時の状況を示したり、他の学生の様子を共有したり、学生に声かけや励ましを行ったりと、クラス内での教員と学生間の関係性の構築は心がけており、授業に出席すること、参加することの意味を大切にしている。

積極的にICTと学習システム、チームコラボレーションシステムを活用し協働学習を実現している。便利ツールとしてシステムを利用するだけでなく、紙とアナログではできなかったような効率的かつ効果的な情報共有や情報の再活用に積極的に取り組んでおり、学習活動を通して個人の情報活用能力を高める機会としている。

3. 教育の方法

ICTの活用を基本とし、学習者は授業前学習、授業中、授業後学習のいずれにおいても自身の保有するパソコンとスマートフォンを駆使して学習できるようにしている。

（1）一斉説明に替わる動画学習教材の提供

講義部分や説明・解説部分は動画教材として配信し、学習者は自らのタイミングで好みのスピードで教材を視聴できるように提供している。動画を見ながら問題を解いたり、一時停止しながらじっくり考えたり、わからないところは繰り返し再生して理解度を深めるといった学習者ごとの学習ペースを構築することができる。既修得度が高い学習者にとっては、動画再生前にまずは腕試しで応用・発展問題に取り組んでみて躓いてから動画を視聴したり、動画視聴時も1.5倍や2倍で再生することで素早く吸収したりといったスタイルを取ることでもできる。個々の違いに応じた個別最適な学習を構築できる学習スタイルであると言える。

（2）自律的で自己学習が可能な学習プラットフォームの提供

プログラミングや数式記述などの学習において、ミスやエラーを繰り返しながら正しい記述法を修得していく。従来は教員や授業補助員による個別のフィードバックを必要としたが、新時代の学習プラットフォームを用いることで即座の自動採点、自動フィードバック、課題の再挑戦が可能となってきた。授業中、授業外のいずれにおいても自律的に自己学習ができる機会を提供している。

（3）基礎学習部分を予習課題とする反転学習形式

教科書通り真似をする、教科書に記載されている重要用語を覚え込むといった基礎学習部分は教員を必要としない学習であるため、これらを予習課題とし、授業開始までに基礎固めを行うこととする。練習問題や基礎的な課題の一部も自動採点型学習プラットフォームを用いることで事前学習として成し遂げることが可能である。授業開始時点から応用的な演習を行ったり、学習者同士の議論、教員への質問などを行ったりすることができる。

（4）デジタル板書の配布

授業中は黒板やホワイトボードを用いず、代わりにスクリーン+デジタルペンを用いている。具体的には、教材として用意しておいたスライド資料や白紙スライドをスクリーンに投影し、デジタルスタイラスペンで解説や数式を手書きで書き込み、授業終了時には手書き情報を含むスライドを保存する。授業終了時には手書き記入済みのスライドを学習者に配布する。学習者はただ書き写すだけの作業的な学習から解放され、組み立てて考える学習や議論に専念できたり、自分のノートと教員の板書を見比べたり補えたり、授業の流れを思い出せたりといった復習効果などが生まれている。

(5) eワークシート教材の活用

学びの流れを構成し、1枚のシートにて導入、内容理解、発展、まとめまで一連の学習を構成するワークシート型の学習をデザインし、実現している。学習目標を明示できること、ゴールや目標や最終成果物をあらかじめ提示できること、流れに沿って学びやすいなどの特徴がある。学習は予測や思考、挑戦や実験、発展、議論、まとめ、振り返りなどから構成され、順に学んでいくことで自然と学びが深まる仕組みとなっている。LMS上にeワークシートシステムを構築し、これを利用することで大規模に複数クラスでの統一カリキュラムの授業が実現できたり、蓄積された学習記録データを再利用するような学び（例えば過去の振り返りを抽出して見渡す振り返りの振り返り）がスムーズにできたりするようになってきた。eワークシートを用いる前と比べて、eワークシート活用授業においては振り返りが深まるという効果が明らかになっている。

4. 教育の成果

(1) 学習の理解度と到達度

伝統的な教師中心の一斉型授業形式から、学習者が自ら構成できる学習形式へと授業形式を転換したが、理解度が落ちたり到達度が落ちたりといったネガティブな効果や影響は見られなかった。既修得度の高い学生にとっては早く目標まで到達し、空いた時間をさらなる学習に注ぎ込むなど、効率の良い学習が可能となった。授業を休んでしまった学生にとって、資料や動画教材を用いることで補うことも容易となり、目標到達に関してポジティブな効果がある。

(2) 学会・研究会、高大連携、産学連携等における外部評価

本田直也：「リフレクションを深める e ワークシート型教材の導入」, 情報コミュニケーション学会 第 23 回全国大会, pp.40-41 (2026)

本田直也：「生成 AI を活用したレポート評価方法の考案」, 大手前大学論集 第 25 号 pp.103-116 (2025)

本田直也：「パソコン必携化に伴う情報系演習授業の変化と影響」, 大手前大学論集 第 23 号 pp.133-143 (2023)

本田直也, 大塚貴司：「自動採点機能を用いた自律型プログラミング学習の試み」, 電気学会研究会資料 情報システム研究会, IS-23, pp.41-42 (2023)

本田直也：「反転学習型の動画学習による情報系演習授業の実践」, 電気学会研究会資料 情報システム研究会, IS-23, pp.35-36 (2022)

5. 改善への努力と今後の目標

学びのデジタル化と過去の蓄積分の再利用が十分に進んできたため、安定的に効果のある授業を繰り返し実施できるようになってきた。現在は過去の蓄積分の修正や微調整を行い続けており、その効果を維持したり高めたりすることに注力している。

1 教員単独で担当する授業をほとんど受け持たなくなり、複数教員で 1 クラスを担当する授業や、大規模に同一授業を複数クラスで展開し複数教員が関わるような授業を担当している。そしてほとんどの場合、コーディネーター役を担っており、代表して授業カリキュラム作成、教材作成、教材配置、学習システム上での授業運用を行っている。上記のデジタルを用いた教材作成や教材共有の経験が大変役立っており、安定的に複数クラス運用ができています。こういった経験とノウハウを、自分に関わっていない授業にも伝えていくことが今後の課題であり、教育実践論文の執筆や、FD などで話題提供を通して広く広げていく予定である。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：本田 直也 作成日：2025年12月31日

【添付資料】

各年度「授業アンケート」

各授業における LMS 上の学習記録データ

Microsoft Stream、YouTube 上に配置している授業動画・学習動画

Microsoft Teams 上で協働学習と情報共有を行った共有ファイル一式と書き込み一式

プログラミング学習プラットフォームシステム TechFUL 上に設置した自律型学習教材